

宗春ロマンシリーズ ①

— 庶民の元気とよろこびこそ —

# 尾張宗春公の実像

大きな愛と広い心で、お洒落に威風堂々と

宗春ロマン隊

遊歩和尚

## 停滞期の現代にこそ、宗春公の発想が生きる

享保・元文年間(1700年代前半)、絶対的君主に近かったといわれる江戸幕府第八代將軍徳川吉宗公。彼の享保の改革という儉約・緊縮財政で、幕府の財政赤字は改善されたといわれます。幕府の金庫は豊かになったかもしれないませんが、江戸でも地方でも飢饉と重税による一揆が続発。儉約令によって庶民の楽しみは抑制され、徹底した管理体制が敷かれていました。そのため吉宗公在世当時の、將軍人気は決して高くはありませんでした。吉宗公時代の政策が、庶民にとって良いものであったかどうかは疑問です。吉宗公の政策は政権にとって都合の良いものであり、だからこそ吉宗公は政権維持の英雄なのです。

当時のほとんどの大名や旗本が幕閣が主導する儉約・緊縮財政に追従。その中、ただ独り、積極経済政策をとった大名がいます。御三家筆頭尾張藩第

七代藩主**徳川宗春**公：元禄九(1696)年十月二十八日〜明和元(1764)年十月八日。

宗春公は吉宗公と同じように、家督を嗣ぐ立場でない生まれでありながら、兄たちの相次ぐ死などで、尾張藩主となります。儉約質素で実利優先の吉宗公に対し、積極経済で芸術を愛でた粹の宗春公。しかも宗春公は、吉原太夫であった春日野(貞幹院)を身請けし、名古屋城下郊外に遊郭(花街)の許可も出しました。そのこともあり、テレビドラマでは、吉宗公を英雄視し、宗春公は遊興に走る敵役にされることが多いのですが、実像の彼は悪役どころか、先進的な思想の持ち主であり実践家でした。宗春公が主導した政治は、イギリスの**アダム・スミス**の**国富論**(1776)より**四十五年も前の積極経済**。庶民のよろこびを優先させ、**芸事を奨励**。財政出動ではなく、**規制緩和を行ない民間の活力を高める**ものでした。**フランス人権宣言**(1789)よりも**五十八年も前に「疑わしきは罰せず」**を実施。藩主時代には**死刑を行う**こともなく、**身分にかかわらず命の尊厳を謳い**、世界に先んじた政策を実際に数々行ないました。また、自分の考え方をまとめた『**温知政要**』を主だった家臣に配り

ました。こうした書物を大名が出版した例は宗春公が初めてです。その内容は、諸外国の思想よりも進んだ内容であり、現代にも十分に通じるものです。

彼は財政再建よりも前に、**庶民が心身ともによろこぶ**ことを理想としました。財政出動ではなく、規制緩和による積極経済を採用し、宗春公時代の**名古屋は空前絶後の繁栄**を見せたのです。芸所名古屋、職人の街名古屋、特産物にあふれた尾張藩（尾張・美濃・三河・信濃）の基礎を築いた人物。大きな愛情と広い寛容の心を大切にする仁徳の政治。法は少ないほうが良いという文治政策。それは法律を絶対視する法治主義を貫く幕府に反し、仁徳により一人ひとりの庶民の良識を育て、気づき大切にするものでした。

宗春公は、財政問題と遊興な生活を幕府に咎められて、蟄居謹慎させられたといわれています。名古屋に三つの遊郭ができ、さらに彼自身の奇抜な服装から、財政放漫を連想されたようです。しかし、宗春公の政策は幕府のそれを先回りするようなものばかり。実情は放漫であったかどうかは疑問が残ります。残されている記録は、宗春公にとって都合の悪いものばかり。幕府

にとつて都合の悪いものは消去されている可能性が高いからです。幕閣は、自分たちの政策の過ちが際立ってしまふことを畏れ、宗春公を失脚させるように、最後は強引に導いていきます。そして最後には、吉宗公は宗春公に蟄居謹慎を命じざるを得なくなるのですが、吉宗公が宗春公を蟄居謹慎させた本当の目的は、幕閣とは異なり、財政問題でも遊興のことでもなかつたようです。

吉宗公薨去後、幕府は宗春公に怯えます。宗春公は隠居所で文化を愛で、後進のための道づくりを楽しんで居られました。宗春公が薨去した後も、幕府は怨念を勝手に想像し、それに怯えます。彼の薨去後、何度も謹慎解除の願いが出されるのですが、幕府は一環としてそれを認めませんでした。そして七十五年にしてようやく蟄居謹慎が解かれます。それほど宗春公の蟄居謹慎には無理があつたのでしょう。いつしか尾張藩内でも、想像が想像を呼び、宗春公を怯え、ついには彼を天王権現として祀り上げるまでになりました。明治維新の際も、宗春公の力を借りようとした形跡さえあります。しかし、

明治維新を経て、太平洋戦争の始まる直前に天王権現社の社は後代の寺院によって売却されてしまいます。また墓石も焼夷弾に被弾し焼けただけたままになっていました。

名古屋錦の寿司喜多八の社長ご夫婦が、宗春公の人徳を慕い、その墓石を直そうと提案。その墓石を修復すべく、ボランティア（宗春ロマン隊）が集まり、墓石は修復されました。墓石修復に伴い、宗春公の事績を調べるうちに、宗春公に関する世間の噂や今までの研究は間違いが多くあり、さらにその大いなる発想は名古屋にとどまるものではなく、日本全体、いや世界全体に通じるものであることが分かってきました。これは安田文吉南山大学教授が長年示唆されてきたことです。昭和元祿と呼ばれたバブル期が過ぎ去り二十年。日本だけでなく世界的に見ても、バブルが過ぎ去り停滞期の昨今。平成享保・元文時代とも言えるかと思えます。その**今だからこそ宗春公のような発想が求められる時代**ではないでしょうか。「**庶民のよろこび**」を第一に考えた宗春公の発想はとても重要です。徳川宗春公の生涯こそ、今の時代を乗り越えるヒントが隠されていると思います。

以下、宗春公の周辺を眺め、彼の事績を見つめ直します。特に宗春公と吉宗公との関係を見直し、宗春公の蟄居謹慎の理由の真実に迫りました。そして別冊では、質疑応答形式の初心者向けのものと、彼の主著『温知政要』の原文と現代語訳を併記、略歴年譜を記しました。

これらの冊子を通じて、宗春公の思いが現代に蘇り、「世界中のよろこび」に繋がることを願ってやみません。

## 目次

p. 2	停滞期の現代にこそ、宗春公の発想が生きる
p. 8	目次
p. 11	宗春公の主な経歴
p. 13	吉宗公・宗春公治世下の享保の世相
p. 17	宗春公の独自の思想と政策
p. 27	宗春公の経済に関する判断
p. 31	尾張藩と宗春公を恐れた幕府
p. 37	本当に宗春公と吉宗公は対立したのであるだろうか？
p. 44	就任一年後の詰問
p. 49	宗春公の蟄居日前後の吉宗公の不可解な行動
p. 52	当時の朝廷と幕府の關係
p. 59	蟄居を申し渡した使者
p. 66	宗春公の親族



参考文献

『温知政要』 徳川宗春 享保十六年

『徳川実紀』

『遊女濃安都』(国立国会図書館所蔵)

『尾張徳川家系譜』(名古屋叢書)

『尾藩世紀』(名古屋叢書)

『金府紀較抄』(名古屋叢書)

『近世の朝廷運営―朝幕関係の展開―』

久保貴子

『徳川宗春年譜』尾崎久弥

『歴史探索 徳川宗春』舟橋武志

『規制緩和に臨んだ』名君』

徳川宗春の生涯』大石学編

『徳川宗春 尾張宰相の深謀』加来耕三

『尾張春風伝』清水義範

『徳川宗春』八頭純

『尾張の徳川宗春』亀井宏

『尾張葵風姿伝』高橋和島

『詳説日本史図録』山川出版

『日本史年表・地図』吉川弘文館

『世界史年表・地図』吉川弘文館

『歌舞伎の歴史』歌舞伎学会

『通兄公記』久我通兄

『翁草』神沢貞幹

『閑窓自語』柳原紀光

その他、皇室・公卿・大名家の系譜図

などを参照

特に安田文吉南山大学教授、及び蓬左文庫の方々には多くの参考になることをお教えいた  
ただきましたた。

# 宗春公の主な経歴

年齢は数え年

元禄九年十月二十八日（新暦1696年11月22日）生まれ

四歳 父の綱誠公(48)が薨去

五歳 祖父光友(76)公が薨去する

十三歳 兄の吉通より通春という名前を授けられる

十八歳 信濃路を通って江戸に移り住む。

兄吉通薨去 その子五郎太逝去 兄継友が六代藩主に

元服し、求馬通春と名乗る

二十一歳 譜代衆、従五位下主計頭叙任。松平主計頭通春となる。

二十四歳 従四位下 大名格を得る

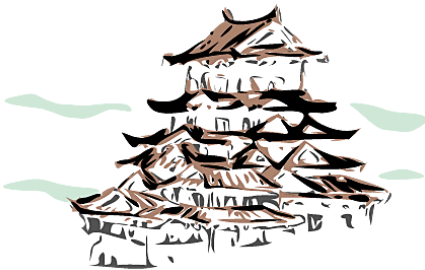
二十九歳 長女誕生（以下、二男六女を得る）

三十五歳 尾張家御連枝となり陸奥梁川三万石の大名に

常在府 国持大名扱い

三十五歳 兄継友が薨去し、尾張七代藩主に

三十六歳 従三位参議・左近衛権中将となる



主著『温知政要』執筆 名古屋へ戻る

名古屋入府の際に、漆黒の馬に、黒尽くめの衣装で庶民を驚かせ喜ばせる全国的に儉約緊縮体制に反し、規制緩和積極経済政策を打ち出す  
名古屋の人口は増え、大いに賑わう

三十七歳 京での『温知政要』出版が所司代より不許可となる

江戸に参勤交代で移った後に將軍家より三か条の詰問を受ける？

四十歳 藩士に遊興徘徊と博打を禁じる。その後、幕府も大名と旗本に同じ令を出す

嫡子万五郎(三)が逝去

四十一歳 一部緊縮体制に移る。幕府の貨幣改鑄等に対する対策

四十二歳 次男龍千代(二)逝去

四十三歳 江戸詰めの中に、老臣により尾張藩内でクーデター

四十四歳 藩内の混乱を理由に幕府より蟄居謹慎を命じられる

名古屋城三の丸に幽閉

五十九歳 名古屋御下屋敷へ転居

六十六歳 閉門が一部解かれ菩提所建中寺に

六十八歳 八事山興正寺に参拝

六十九歳 御下屋敷で薨去(明和元年十月八日(新暦1764年11月1日))

## 吉宗公・宗春公治世下の享保元文の世相

宗春公が生まれた元禄時代（西暦1600年代後半）。五代将軍徳川綱吉公と側用人から大老格となった柳沢吉保。この時代に元禄文化は花開きます。それに続き六代将軍徳川家宣公と側御用間部詮房・侍講の新井白石等による正徳の治。そして八代将軍吉宗公等による享保の改革。享保・元文時代（1700年代前半）とはは綱吉公が薨去されて七年後、まだ元禄文化の残り火がかるうじて残っていました。宗春公の若い時代を育んだのは、この元禄文化の残り火であったと言っても過言ではありません。

### このころの学問が幕末の原動力の礎となった

五代将軍綱吉、六代将軍家宣ともに、徳の治世を重視していました。そのために、元禄時代に活躍した学者は数多く、その愛弟子たちが輩出された時代が享保の時代です。

- ・ 林鳳岡（正統朱子学）及びその弟子たち
- ・ 伊藤仁斎（古義学）の弟子たち

## 伝統芸能と商業の興隆

- ・ 荻生徂徠（護園学派）及びその弟子たち
- ・ 熊沢蕃山（陽明学）の弟子たち（特に宮中で重きをなしていた。幕末に影響）
- ・ 木下順庵の弟子たち（室鳩巢・新井白石など）
- ・ 貝原益軒（本草学・養生訓など）の弟子たち
- ・ 関孝和（和算）の弟子たち
- ・ 渋川春海の弟子たちや中根元圭と幸田親盈などの弟子たち（歴学・和算）
- ・ 契沖（精密な国学の検証）の弟子たち
- ・ 山崎闇斎（崎門学派神道）（特に宮中で重きをなしていた。幕末に影響）
- ・ 太宰春台（経世家・儒学者…『経済録』等）
- ・ 石田梅岩（石門心学）
- ・ 浅井周伯（医学・本草学）の一族と弟子たち
- ・ 松岡恕庵（医学・本草学・崎門学・古義学）の弟子たち



元禄文化と総称されるほど、綱吉公の時代は大きく文化が花を開きました。そして

それを支える商人たちが台頭してきた時代でもあります。享保の時代に入り、儉約緊縮で新たな文化の創設は閉ざされてしまいますが、元禄文化に生まれた芸術の流れは止まることなく、儉約緊縮の享保年間にもしつかりと根づき伝統文化となっていきました。

・歌舞伎俳優たちの活躍

- ・初代二代目の坂田藤十郎
- ・初代から四代目までの市川團十郎
- ・市川海老蔵
- ・初代尾上菊五郎
- ・初代松本幸四郎
- ・初代沢村長十郎
- ・初代中村十蔵（吉右衛門）
- ・初代中山新九郎
- ・初代山中平九郎
- ・初代沢村宗十郎
- ・三代目嵐三右衛門
- ・初代坂東彦三郎
- ・その他

・元禄末期に美人画で有名な菱川師宣が活躍し、浮世絵が世間に広がる

・尾形光琳（絵師）や尾形乾山（陶芸）兄弟の最晩年

・宮崎友禅斎による友禅染

・近松門左衛門（心中物）の最晩年



- ・竹本義太夫の弟子竹本出雲（義太夫）の晩年
- ・江戸・京で宮古路豊後掾の文金（鬻…文金高島田の源流）と豊後節が大流行
- ・紀伊国屋文左衛門・奈良屋茂左衛門など豪商の最晩年
- ・俳諧では松尾芭蕉の弟子の志太野坡、その門下の多賀庵風律、湖白亭浮雲  
芭蕉門下の各務支考の最晩年、その弟子の加賀千代女、仙石蘆元坊、田中五竹坊
- ・歌壇では靈元上皇（法皇）とその門下 中院通躬、武者小路実陰、烏丸光栄など  
その他、当時の宮中の多くは靈元上皇の影響を受ける
- ・書道では、靈元法皇、その子有栖川宮職仁親王による有栖川流
- ・箏曲の生田流、長唄、「さらし」「三段獅子」「六段恋慕」などの手事物が興隆



## 宗春公の独自の思想と政策

### 『温知政要』の深淵

宗春公は庶民が驚き喜ぶことなら何でもしました。奇抜な衣装を整え、祭礼を華美にしたのです。それらを見ると、表面的には宗春公は新しい思想を創設したような感があります。ところが、彼の名著『温知政要』を読み解き、宗春公が実際に行なった政策を見てみますと、過去や他者の良きものを取り出し、それを実践したところに眼目があることが分かります。宗春公の名著『温知政要』のタイトルはまさにそれを表しています。

『論語』の温故知新の「温知」、徳川幕府の祖、東照神君家康公の愛読書である『貞観政要』の「政要」。まさに古きをたずねて新しきを知り、実際の政治で実践する、これが宗春公のもっとも大切なところといえます。

実際に配られた『温知政要』の表には「慈」の文字が赤く、「忍」の文字が黒く、大きく記されています。「慈」とは大きな愛情。「忍」とは広く寛容な心。この二つが、『温知政要』の要。

慈

忍

名古屋城内にも学問の場として「慈忍の間」という部屋ができたくらいです。

では、具体的にはどのような人が、宗春公に影響を及ぼしたのでしょうか。

・宗春公は曾祖父の**尾張藩祖義直**公が制定された御定法を復活させ、東照宮の祭礼も義直公の時代に習っていました。また、祖父**尾張藩第二代藩主光友**公が隠居所として作られた名古屋御下屋敷を復活させ、自身も最後の隠居所としています。宗春公が理想としたのは、『温知政要』にも記してありますように**東照権現徳川家康**公であり、曾祖父藩祖義直公であり、祖父光友公でした。

・**実母の梅津(宣揚院)**は、三十三歳で最初の子を、三十五歳で宗春公を生んでいます。当時としては、かなり高齢で異例。よほど優れた器量か才能を持っていたものと思われまます。宗春公は宣揚院を事の外大切にしているところから、かなり多大な影響を受けたと考えられます。

・尾張藩の御連枝であった**松平摂津守(権少将)義行**。第二代尾張藩主徳川光友の次男で大変英邁な人でした。四代藩主吉通公の時代まで、尾張藩の執政は義行を中心に行われ

ていました。江戸に住んで二年間、宗春公は義行と共に尾張江戸藩邸に居ました。義行は、才能にみちあふれた元服前後の若者であった宗春に、尾張藩の位置づけと、尾張藩を守る御連枝の役割を教授されている可能性は高いと思います。

『温知政要』執筆の最終段階で側に寄せたのは、尾張の儒官であった朱子学者**深田慎齋**。彼は宗春公の巡回にもお供をした側近の一人でした。京の儒学者中村平五の『温知政要輔翼』を校訂しています。宗春公の蟄居と同時に隠居し、長男の深田厚齋に家督を譲ります。深田家はこの後も尾張家の代々の侍講として活躍しました。

・当時、尾張藩の右筆をしていた人物に**朝比奈文淵**（玄洲）と言われる人物がいます。彼は交友のあった尾張藩の**木下蘭皐**と共に享保四年の朝鮮通信使を接待しています。両者ともに荻生徂徠の弟子。文淵は宗春公の治世の初期に亡くなっていますし、蘭皐は宗春公が御下屋敷に移られる直前に亡くなっています。『温知政要』の内容から、**荻生徂徠の護園学派**の影響は無視できません。

・その他、当時の尾張藩には、**天野信景**（宗春公治政時には隠居）、**馬廻組松平君山**、**千村伯濟**、**太田東作**、**蟹養齋**、**河村秀世**・**河村秀頼親子**、**小出巖真**、**須賀親安**・**精齋兄弟**、**近**

松茂矩、松岡仲良など多くの学者がいて、彼らの影響も無視できません。

・尾張東照宮の祀官の**吉見幸和**。宗春公は東照宮の例祭を古式に戻すなど、東照宮を大切にしていたことから幸和の影響は多大であると考えられます。六代継友公の代に祭礼が簡素化されてしまった東照宮祭礼を、宗春公は**藩祖義直公以来続いてきた古式通り賑やかで華麗なもの**へと戻しました。また津島にあります全国天王社の総本社である津島神社の天王祭を名古屋城下でも催します。この津島神社の当時の祀官が**真野綱廣**。綱廣の父親は**真野時綱**といい、伊勢神道の大家の一人です。

・**吉見幸和**は**浅見綱齋**に崎門学を、**正親町公通公**や**玉木正英**に垂加神道を学んだ才人です。伊勢神宮外宮の権禰**度会延経**に伊勢(度会)神道を学んだそうです。正親町公通公は山崎闇齋の門下の一人で、靈元上皇に仕えた公卿です。玉木正英は、京の梅宮大社の神職で正親町公通に崎門垂加神道を学び、後に橘家神道を大成させました。度会延経の父である度会延佳は、伊勢度会神道を興隆させ、豊宮崎文庫を創立した人物です。度会氏は、天火明命と繋がる家系。天火明命は尾張の祖と呼ばれる方でもありますので、そのあたりからも繋がり深いものと考えられます。宗春公の小姓であ



り側近であった河村秀根、その兄河村秀世、二人の父河村秀頼は後に幸和の弟子となります。また、**真野時綱**は、津島神社の祀官で、度会延経の父である**出口(度会)延佳**に伊勢神道を学び、京の吉田兼魚に吉田神道を学びます。度会延佳の著作の解説書も記しています。

・『温知政要』の中で、慈を太陽に、忍を月に喩える下りがあります。これは**真言密教思想**が**下敷き**になっています。真言密教では、太陽は他者を区別せず照らし出し万物を育むことから慈悲の象徴とします。月は暗闇を照らしだす智慧であり、優しく包みこむ母性の象徴でもあり、寛容さも意味するものです。また一文字に深い意味を込める方法論は、弘法大師が持ち込んだ**陀羅尼思想**であり、宗春公は何らかの形で真言密教を学んだものと思われまます。宗春公の御母堂である宣揚院梅津は、信仰深い方であったと言われますし、ご尊父の光友公も寺社再建を多くこなされ仏教とは深い縁がありました。光友公は、尾張藩の祈願所となる**八事山興正寺**を創建されました。当時の興正寺は真言宗泉州神鳳寺派（現存しません）で、宗春公は自らよりも九歳若い**諦忍妙龍**を興正寺の住職に任命します。その後諦忍は五十二年間住職を勤め、宗春公晩年には深く交流していた記録が残っています。



## 医学分野

・先代継友公の代に、京より有名な医者であった浅井家第四代**浅井東軒**を尾張藩御殿医として招きました。東軒没後、その子の浅井家五代**浅井凶南**が尾張藩医として京より名古屋に下向。当時三之丸に蟄居中の宗春公は、その翌年に自らがつつた御薬園のある御下屋敷に移り、御薬園を保護拡張します。ちなみにお薬園の主要なもの一つに人参があるのですが、これは吉宗公より拝領したものです。この御薬園のもとで凶南は、門弟千二百名を育て、後の尾張医学館の礎を築きます。それが今の名古屋大学医学部へと続いています。

・当時の尾張藩には、**松平君山**などの本草学者、その他にも**礁谷滄洲**、**小見山順友**、**高橋玄仙**、**松井寿安**等の医師が居ました。

## 経済政策

宗春公の積極経済政策は、幕閣の緊縮政策とは正反対でした。逆に、幕府が貨幣改鋳

などの積極策を用いず直前に、臣下の引き締めや貨幣改鑄に対する緊縮など、時には幕閣に先んじて手を打つこともありました。彼のような庶民感覚を理解し。マクロ経済もミクロ経済も見据えた大名はほとんど居ません。またそれを学ぶ場も大名屋敷や江戸城中にはなかったはずです。では、彼はどこで経済を学んだのでしょうか。

・遊郭は、商人たちと自由に会話できた場。遊郭に出入りしていた商人たちが、**宗春公の経済学の師であった可能性**は否定できません。豪遊で有名な紀伊国屋文左衛門や奈良屋屋茂左衛門（四代目五代目）も存命していました。宗春公の出入した遊郭は、現代で言う高級クラブに相当し、大名クラスか、大身旗本、貴族、豪商のみが出入りできた場所ですが、**士農工商の身分を越えた社交の場**であったと想像されます。

・名古屋新興・伊藤家（松阪屋・旧いとう呉服店）・関戸家（信濃屋・質屋 薬種 享保年間）は米穀・味噌を扱う 古物蒐集で有名・特に茶道具）などが興隆してきていました。



・藩主となり、名古屋城下の遊郭も賑わった後は、前津屋敷（和泉屋権右衛門から借り上げる）において、和泉屋権右衛門・岐阜屋喜左衛門・播磨屋重兵衛・鞘師又兵衛等の商人と会合をし、そのために家老たちが再三の帰城要請を出しています。

### 尾張藩内の特産物

尾張藩は、尾張国だけではなく、美濃・三河・信濃にも領地を有していました。尾張藩は宗春公を含め代々、藩内（尾張・美濃・三河・信濃）各地域の特産物育成にも力を注いでいます。

- ・忍冬酒・コンニャク・麩・青海苔・塩・告天子・瑪瑙・白石・岩崎石・小金石
- ・白石英・祖母懷土・松茸・牛蒡・瓜・葱・蕪・茶・西瓜・タバコ・干大根
- ・枝柿・栗・素麺・酒・早稲・ナス・桃・材木・提灯・団扇・起炭・薪
- ・木箸・楊枝・錆鉄・旗竿・刀・和紙・染物。有松絞り・鳴海絞り・縮緬
- ・木綿・紋縮緬・薄絹・錦糸・曾代糸・蚕蛹・藍・箕・削刀・砥石・瀬戸焼
- ・常滑焼・美濃焼・竹器・畳・松・杉・甕・瓦・藁籠・鮎・鮎鮨・海藻
- ・牡蠣・鱒・蜆・蛤・鯨・鱸・鯛・河豚・キス・コチ・鳥貝・鯉



## 尾張藩内の芸能

・「芸所名古屋」という言葉があります。これは宗春公の時代に培われた芸術が、名古屋に根付いたためと言われています。

・東照宮の祭礼を古例通り華やかにし、天王祭を名古屋で催し、若宮祭りを盛り上げるなどし、職人の仕事が増加（例・祭礼時の花火の発展 からくり人形 大山車等）

・お茶では名古屋周辺に両替町久田家（久田流）が、名古屋は松尾流、宗和流が興隆

・歌舞伎の賑わい・藤岡大吉 ・南北三帰 など

・芝居小屋の常設が六ヶ所に 年間百三十本以上演じられる ・名古屋心中と豊後節

## ファッションリーダー宗春公

宗春公は、藩内巡視に出た折は、多いときには一日に六度も着替えたといわれています。

その出で立ちちは、人の眼を奪うものばかりで、まさに当時のファッションリーダーでありました。このファッションが、経済的にも興隆していく基になっていました。

・名古屋初入府の時に、唐人帽や真っ黒な衣装をしたと言います。これは朝鮮使節団の正装。海外の東洋人は一括して唐人と呼ばれていた当時、鎖国下の日本では、朝鮮使節団の姿は時代の最先端をいくものでした。漆黒の馬に、真っ黒な帽子と衣装、そして縁取りは華やかな金色。今の時代でも十分目立つものです。

・白い牛に、長煙管、女性者の襦袢に、派手な羽織り。その当時日本にやってきた海外の動物の代表が象と白い牛。象は名古屋を経由したという記録も残っています。本当は象に乗ってというのが、望みだったかもしれませんが、輸入物ではなく、同じような白い牛を探させて、その背中に乗るとするのは、入府時の漆黒に対応するものであり、長煙管も派手な衣装も、ファッションリーダーとして新たな美を創造していたとも言えます。

## 宗春公の経済に関する判断

### 規制緩和・重商政策

・六代藩主継友公の際に、藩の財政は黒字に転じたと言いますが、実際の尾張藩は重税と緊縮・儉約で沈滞ムード。庶民の楽しみでもある祭礼さえも簡素化されていました。ある意味、幕府から見たら優等生。しかし宗春公は、規制緩和・重商政策を打ち出していきます。それにより、名古屋に多くの人が集まり、名古屋は空前絶後の繁栄を示しました。

・宗春公蟄居の原因として、宗春公就任後の財政悪化を証拠としている研究が多いのですが、実際に財施悪化となったかどうかは疑問が残ります。三ヶ条の詰問を受けたときも、「借金を返して、今は借財もなく財政は好転している」と明言しています。また、元文二年の借財は、幕府が行った貨幣改鑄によるインフレーション対策であり、借財をすることで尾張藩内の貨幣の流通量を減らすもの。財政悪化の証拠どころか、逆に見事なインフレーション対策をしていた証拠です。また現在残されている財政の証拠記録は後代のもので、その上、宗春公時代に記されたものではありません。またその記録でも、



宗春公直後のものは米の収支が抜けています。幕府にとって都合の良いものばかりが残されている可能性もあります。幕府の緊縮財政にとって都合の悪いものは証拠隠滅改ざんが行われた可能性は非常に高いのではないのでしょうか。実際のところの財政状況は不明としか言えません。

### 時代を読んだ突然の緊縮

・享保二十年、宗春公は、三月に江戸在府の藩士に、参勤交代で名古屋に戻るとすぐの四月に名古屋の諸役人に、遊興徘徊を禁じる旨を打ち出します。これを藩士たちの暴走が理由であるとすることもありませんが、むしろ幕閣の動きに先駆けたものであると言えます。この年の八月に大名旗本に遊里に出入することを禁じる命が幕府より出されます。幕府の情報をしっかりとつかんでおり、まさにそれに先駆ける命令を出したのです。

・享保二十一年に、宗春公は積極経済から一転して緊縮政策を少しづつうち出します。三つあった花街のうち、ひとつだけを残して、他は廃止するという政策に出ました。

幕府が前年の享保二十年に米価調整令をだし、享保二十一年改め元文元年には貨幣を改鑄（元文の改鑄）と公定米価の廃止などをします。幕府が突如積極経済を打ち出した

のです。それまでの儉約緊縮財政で、貨幣が流通しなくなり、デフレーション（不況）に陥り、財政までも逼迫し始めたためです。それを解決するために、貨幣を改鑄することになりました。元禄年間に荻原重秀の献策で行なわれた政策を、大岡越前守忠相や荻生徂徠達が献策したのです。大岡は町奉行として庶民の声を聞きやすい立場にいたので早くからこの政策を主張していたのですが、老中松平将監乗邑などの反対派が多く、実施が見送られ続けてきました。ようやくこの積極経済政策が実施された直後に大岡忠相は寺社奉行に栄転。ただしこの栄典は実質的には幕閣中枢から遠ざけるためでもありません。本来寺社奉行の兼務である奏者番には任じられず、大名になったとはいえ、かなりの閑職に追いやられたのです。大岡が寺社奉行になると、反大岡派の松波筑前守正春が後任の江戸南町奉行に就任。また同じ反大岡派の神尾春央が勘定吟味役になります。翌年には神尾春央は勘定奉行となり、松平乗邑が勝手方老中（老中首座）となります。神尾は「百姓と胡麻は絞れば絞るほど出る」という言葉を吐いて、悪名を轟かせた人物です。尾張藩は開放政策のために、景気がよく、既にインフレ傾向にありました。そこで宗春公は、市場に貨幣が溢れてインフレーションの波に飲み込まれないようにするための防波堤として、緊縮政策を行いました。三つあった遊郭のうち一つを残せば、全滅は防ぐことができ、その一つの繁栄も維持できるといふ判断だったのではないのでしょうか。また、元文二年には藩内の領民に借財をし、藩内の貨幣流通を抑えました。全国的に激

しいインフレに襲われ、五月には尾張藩内でも改鑄による騒動が起きたそうです

このインフレーション時には緊縮をし。デフレーション時には規制緩和をするというのは、洋の東西を問わず、商業の現場にいる経済通である者には自明の理でした。しかし、幕閣はこの政策を理解していませんでした。米を経済の中心に据えた重農政策を取り、しかも開墾によって米の流通が多くなることで米価が下がり、幕府の財政はより逼迫していきましました。宗春公は、幕府のこの失政を予見していたからこそ、尾張藩内に影響が出ないように、敢えて幕府の政策と反対の行動を取り、日本全国で唯一の繁栄を見せたようです。

残念ながら、幕閣と連携した家老たちの反乱で、宗春公は自分のとった行動の成果を見る前に謹慎蟄居となってしまいます。

## 尾張藩と宗春公を恐れた幕府

・六代将軍徳川家宣公は、嫡男家継公が幼かったために、七代将軍に尾張藩第四代藩主吉通公（宗春公の長兄）を望んだと言います。吉通公は非常に優秀であつたらしく、さらに吉通公や宗春公の父である三代藩主綱誠公の母親は、三代将軍家光公の長女でしたので、血統的にも家宣公に近く、能力的にも十分だったからです。しかし侍講の新井白石たちの反対で家宣公は吉通公を後継にすることを諦めます。その後、吉通公が突然に薨去し、家宣公夫人の近衛熙子（天英院）に推挙されて、吉宗公が将軍職に就くこととなります。その時、最大のライバルは、吉通公の弟で、宗春公の兄である、尾張六代藩主継友公でした。新井白石達は今度は七代将軍家継公の実母である月光院と共に継友公を推しますが、絵島生島事件などが重なり、さらに継友公の能力の問題もあつたためか、吉宗公が将軍職に就くこととなります。これに憤慨した宗春公の兄である松平通温は乱行のため名古屋場内に幽閉されてしまします。将軍継承問題で、吉宗公は尾張家を押さえこんだために、幕閣達は尾張家を警戒していくこととなります。ただ不思議なことに、この継承問題に関して宗春公は全く動いた形跡がありません。後に、宗春公は兄の継友公の政策を否定していくところから見て、宗春公自身は兄の将軍継承にあまり賛成では

なかった可能性もあります。

・藩祖義直公（敬公）以来、御三家とは、将軍家と尾張藩、紀州藩であり、水戸藩は御三家ではないと尾張藩では認識していました。水戸藩は禄高や附家老が尾張や紀州に比べて極端に少なく、官位も最高で権大納言である尾張家や紀州家に比べ、水戸藩は権中納言でしたので、水戸藩自身も御三家としての格下を認識していたようです。二代将軍秀忠公在世中は、秀忠公次男の駿府大納言徳川忠長公のほうが水戸家よりも上臈で、尾張家と紀州家と同格の石高と官位でした。しかし、忠長公は改易させられてしまいました。その後、将軍家と尾張・紀伊が同格という考え方は幕閣にとつて問題がありました。将軍家の権威を他の家よりも上位に置かねばならなかったからです。

この御三家問題を、三箇条の詰問の際に、控えの間で宗春は堂々と述べたといえます。これが事実ならば尾張藩主としての矜持があったのでしよう。

・幕府の政策と反する行動をとった尾張宗春公の尾張領内が空前の賑わいを見せ、一揆も起きずに、高い成果を見せたことが幕閣の政策に問題点を突きつけていました。尾張藩領内の人口が爆発的に増えていました。幕府の政策では貧困の小作農の数が格段と増えていたのです。しか



も宗春公の政策は、重商主義。重農主義であった幕藩体制を揺るがす可能性を秘めていました。吉宗公が目指した幕藩体制は法治主義であるのに対し、宗春公が目指したのは仁徳に基づく法の少ない文治主義であったことも問題でした。さらに、宗春公は貨幣の改鋳や公定米価廃止による強度なインフレを見抜いていたために手を打ったようですが、幕閣はそれを甘く見ていました。老中松平乗邑と勘定方役人の神尾春央にとって宗春公の存在が自分たちの政策を否定する象徴であったのです。

・尾張藩内には藩主主導を快く思わない石河一族（附家老竹腰山城守正武も石河家出身）がいました。石河家は、関ヶ原の戦いでは西軍につき、後に尾張家に召抱えられています。尾張藩に対して、誰よりも恩義を感じている一族でした。末弟の石河政朝は幕府の役人であり、目付、小普請奉行、北町奉行、大目付、西の丸留守居などを歴任していく幕閣の中心人物でした。そのため、竹腰正武は幕府と結びついて、反改革派の頭目として、虎視眈々とクーデターの機会を狙っていたのではないかと推測されます。竹腰正武にとって、尾張藩は絶対大切な存在です。藩主の首をすげ替えることができませんが、藩は取り潰せなかったからです。さらに、継友公の時代となり、御連枝方が亡くなった後は、附家老が中心になって家老による合議制で尾張藩を動かす、藩主は承認を与えるのみとなりました。継友公の時代の尾張藩は吉宗公政権の政策に従い、優等生であ

ったようです。ところが、突然に宗春公が藩主に就任。家老たちの合議制よりも、トツプダウン型の政策を持ち込みます。しかも幕閣が嫌がる政策ばかり。竹越正武の目には幕閣から睨まれるという尾張藩の危機が映っていたものと思われます。彼にとつては尾張藩の庶民を守ることよりも、尾張藩そのものを守ることが最優先。最終的に弟を通して、松平乗邑を中心とする幕閣と結びついて、宗春を蟄居に追い込んで行きます。幕府の政策に反する宗春が邪魔な幕閣と、藩を守るために合議制で幕府に従順な藩づくりを目指す竹越山城守の思惑が一致してしまつたわけです。しかも、尾張家の御連枝高須藩第三代となつた松平義淳（のちの八代藩主宗勝）には子どもがたくさん居り、後継には困りませんでした。

・宗春公にとつての遊郭は、庶民の遊び場であるとともに、商人たちと自由に語り合う学習の場でしたが、それを良しとしない者が幕閣にも藩内にも少なくありませんでした。

藩主は側室をたくさん持つことができ、何故に遊郭に遊びに行かねばならないのか理解できなかったからでしょう。おそらく宗春公は、粋な人でしたので、本当の目的を誰にも告げずに、遊びながらも多くのことを学んでいたのではないかと思ひます。



・吉宗公が八代將軍就任時にもっとも強力に後見をしたのが六代將軍家宣公正夫人の天英院近衛熙子でした。天英院との関係で近衛家と結びついていた吉宗公。近衛家が、禁裏の中核にいた享保年間には比較的幕府と朝廷は穏やかでした。しかし、桜町天皇が即位し、土御門上皇が崩御され、桜町天皇の親政となると、近衛家と対立していた一条兼香公が関白となります。大嘗会を復活させ、新嘗会の再興など、朝廷の活動が活発化。尾張藩は藩祖義直公が尊王家であり、尾張藩と朝廷とが結びつくことを吉宗公は恐れたと推測されます。

・宗春公を蟄居させた後、言いがかりをつけ無理やり幽閉してしまったという罪の意識が幕府には残ったのではないのでしょうか。宗春公が蟄居後に附家老に就任した成瀬隼人正正典は、晩年に宗春公の復権を目指しますが、果たせず亡くなります。正典死の翌年に外国船出没で攘夷のために御下屋敷内に仁王山護国寺清久院が創建され、鎮守として宗春公が祀られることとなります。しかし幕府は蟄居謹慎を解かず、最終的には十代將軍家斉の子が養子に入ることです。宗春公の名譽が回復します。この時まで宗春公のお墓に金網が被せられていたといいますが、公式記録にはそれらのことが記されておらず、うわさ話が先行しています。こうしたうわさ話が飛び交うくらい、宗春公に対する恐れが一般的に広がっていたのかもしれない、

・宗春公が薨去され約五十年後に、六年連続で（文化十四(1817)年～文政五(1822)年）イギリス船が浦和沖に現れました。日本で攘夷の風が吹き始め、一橋家から養子を迎えて藩主（斉朝公）としていた尾張藩も、それに対応すべく御下屋敷内に仁王山護国寺清久院（現在の永平寺別院）を創建します。仁王護国経という鎮護国家を説く仏教経典から名前をとったお寺で、攘夷のための祈願所として建立されました。その鎮守として山王権現社が建てられます。この社は孚式権現と呼ばれ、宗春公を主神に、初代將軍家康公と初代藩主義直公を合祀したものです。これは宗春公の崇を恐れたのと、その力を認めていたが故のものです。

・宗春公の五十回忌直後に、尾張藩の江戸下屋敷（戸山屋敷）内に精林庵と呼ばれる宗春公の菩提を弔うお寺が建てられました。ペリー来航や日米・日英・日露和親条約などに對抗し、さらに安政の大地震後の安定を求めるために、尾張藩十四代藩主徳川慶恕（慶勝）公は、精林庵を名古屋御下屋敷に移転させ宗春公の菩提を弔いました。井伊直弼大老の強権に反対し、安政の大獄で蟄居させられた慶恕（慶勝）公。宗春公と同じように、幕閣に對抗しようとして宗春公の御加護を祈ったように思われます。

## 本当に宗春公と吉宗公は対立したのでしょうか？

・尾張藩主の子とはいえ、庶子しかも第二十男であり、半年先に生まれた兄に比べて三年も任官が遅かった宗春公。一生部屋住みのままか、親藩譜代に養子に行かされる可能性もありました。その宗春公を主計頭に任官したのは七代將軍の後見であった紀州吉宗公であり、大藩

並みの待遇である御連枝に引き上げたのも、ほかでもない八代將軍吉宗公でした。さらに廃絶した尾張家御連枝大久保松平家を復活させ、宗春公に継がせたのも吉宗公でした。宗春公が、御連枝の藩主になる前は吉宗公より鷹狩の獲物を拝領する等、良い関係でした。堀田伊豆守正虎、内藤豊前守弑信、松平但馬守友著などと共に、祭礼時には將軍のお供をするなど、親藩譜代の中でも吉宗公の側近の一人として扱われていたようです。また尾張藩主継友公が亡くなった後に、兄で御連枝筆頭の高須藩主の松平義孝を超えて、弟であり御連枝に連なったばかりの宗春公が尾張藩主となったのも、吉宗公の許可があったからです。義孝が病気がちであったという推測が罷り通っていますが、自分の後継者でさえ長幼の序を重んじた吉宗公が、尾張藩で弟が兄を超えさせることをするはずが



ありません。しかも、義孝は宗春公が尾張藩主になる年の始めに、病氣平癒のお礼を述べに將軍吉宗と対面しています。さらに宗春公は梁川藩の藩主となったばかりで、兄を飛び越えるというのは通常では考えられません。継友公が自分に何かあったときは宗春公に跡を取らせるようにと生前から述べていたといいますが、それならば尾張藩に残るはずで、御連枝大名として独立することはなかったはずで、これらの状況から、宗春公が兄の義孝を飛び越えたのは、よほど特別な事情があり吉宗公が採決したとしか考えられません、

・兄の六代藩主継友公と吉宗公が輸入した象を見学しています。これは継友公が江戸に下向したことで記録に残っているもので、おそらく在府していた宗春公は既に象を見ていたものと想像されます。

・藩主になってから、大代官の手代の渡辺宅左衛門と広田利右衛門の両名が白い牛を探しだしたことから錢二百疋を与えました。わざわざ白い牛を探させたのは、吉宗公が享保十二年に白いインド牛を輸入し、安房で放牧し始めたからではないでしょうか。既に宗春公は任官し江戸城に出仕しているので、宗春公の性格からしても、白い牛を見ている可能性があります。しかも、元文二年二月に江戸で象と白牛の油菓のお店が二軒でき

たという記録があります。このことから、白い牛は象と同じほど貴重な輸入動物として扱われていたようで、宗春公はとても気に入られたのではないでしょう。吉宗公の白い牛に合わせているあたり、むしろ追隨しているくらいで、とても対立しているとは考えられません。

・吉宗公より拝領した朝鮮人参と洪州甘を名古屋御下屋敷で栽培し始めたのは、宗春公です。蟄居後、御下屋敷に移った後も、御薬園で大切に育てていたそうです。この御薬園が、その後の尾張藩の医学発展に役立つことになるのですが、対立していた人から拝領したものをこれほど大切にすることでしょうか。

・宗春公が批判しているのは、吉宗公ではなく、松平乗邑をはじめとする幕閣に対してではないでしょうか。宗春公は側近として星野織部を重用していますが、これは藩主による親政を意味するものです。家康公の本多正信・正純親子。綱吉公後半の柳沢吉保。家宣公の間部詮房と新井白石。綱重公の大岡忠光。家治公の田沼意次など、いずれも將軍の親政と直結する人事でした。一方、当時の幕府は、享保前半は水野忠之が、後半は松平乗邑が中心となる幕閣による運営でした。他の時代では家光公時代の松平信綱、家綱公時代の酒井忠清、綱吉公前半の堀田正俊、家斉公前半の松平定信、家慶公時代の水

野忠邦、家茂公時代の井伊直弼など老中を中心とした合議制。これを藩政に当てはめますと、家老たちによる合議制の政治運営と藩主と側近中心の親政とに分かれます。宗春公は合議制も大切にしますが、その弊害も理解していたようで、尾張藩附家老竹腰山城守や家老石河伊賀守らに対抗するために、星野を側近として重用し、藩の家老格にしました。宗春公から見ると、老中や若年寄が、藩政のなかの家老に相当することから、吉宗公批判よりも幕閣批判であったのではないでしょう。

・吉宗公は最初の詰問をした享保十七年の後も、とりたてて宗春公を処罰することはありませんでした。しかし、元文三年参勤交代で宗春公が江戸に下向した後に、尾張藩内で家老たちがクーデターを起こします。宗春公の法令を全部破棄し、逆に宗春公の名前で名古屋と岐阜の町に多大な税金を課しました。もちろん宗春公の政策ではありません。これは、北町奉行石河政朝が中に入り、老中松平乗邑と、政朝の実兄の尾張藩附家老竹腰正武が結びつき、幕府の方針に逆らい幕閣にとつては大きな障害であった宗春公を追い落とそうとしたからだと思われます。しかし、吉宗公は宗春公を処罰することを許可しませんでした。家老たちは、更に強硬に藩内で圧政を行ない、農民にも多大な課税を強い、宗春公の評判を落とします。それでも吉宗公は処分を許可しませんでした。老中が尾張藩の家老を呼びつけ注意をうながすという行為にも出ますが、それでも吉宗公は

動きませんでした。その吉宗公が、突如として元文四年正月に蟄居を言い渡します。これは、それまでの経緯を見ても、あまりにも唐突で、財政問題や遊興などという問題があつたからではないと思われれます。

・吉宗公が宗春公を処罰せざるをえなくなった本当の理由とは何なのでしようか。尾張でクーデターが起きた前後の日本全体を見つめてみますと、朝廷に大きな動きが現れます。蟄居の前年元文三年に朝廷は反幕府の一条兼香公を関白に指名します。親幕府の近衛家熙公が薨去した翌年のことです。さらに朝廷は元文三年に大嘗祭を復活させます。表面上、幕府はそれを応援します。しかし財政が逼迫していた幕府が、大掛かりで費用がかかる大嘗会を心から喜ぶはずがありません。また、前回行なわれた五十年前の大嘗祭は、反幕派の霊元上皇が主導したものであり、大嘗祭は反幕派の朝廷復権のための象徴的な儀式でした。

今回の大嘗会を主導した一条兼香公は、吉宗公の出身である紀伊家を馬鹿にし、尾張家を持ち上げる日記を記しています。また尾張家は、藩祖義直公の時代から尊王派。義直公は水戸家の光圀に尊王思想を教授したほどの尊王家でした。宗春公の愛妾で、実質的に正妻待遇を受けていたお薫の方は京出身。さらに尾張藩の医師も儒官も京で学んだ者が多くいました。



名古屋東照宮の神官の吉見幸和は、朝廷と深く結びついていた人ですし、宗春公の側近の河村秀穎と、お薫の方は靈元法皇に非常に近かった朝廷の冷泉為村を師としていました。さらに、四代藩主吉通公の息女が五撰家の九条家に嫁いでおり、その子息が九条家と二条家の当主となっていました。宗春公からすれば、姪の子が五撰家の二つの家の当主になったわけです。この尾張家に朝廷の反幕派が接近すれば、幕府としては見逃せません。更に、吉通公の母親の清寿院は、幕府により乱行を叱責されて幽閉されていたのですが、宗春公は彼女を解放しています。これは幕府の意向に逆らい、宗春公が吉通公に連なる九条家と二条家との関係を大切にすると外見上は見られかねません。

宗春公が突然に蟄居を命じられたその日のうちに、吉宗公は朝廷に使者を出し、貢物を送り、さらに二条家当主（宗春公の姪の子）に宗の一字を授け宗基と名乗らせ、一条兼香公にも相当な贈り物をしています。一見年賀の贈答なのですが、宗春公に蟄居を命じ、御三家始め各親藩が自主謹慎し、江戸城の門が半開きにされたほどの凶事の日にお祝いの品を贈るでしょうか？ この直後に突然に紀州藩主徳川宗将の後妻に、一条兼香の娘が嫁ぐことが決まりました。

宗春公の蟄居の真相は、朝廷問題の可能性が高いと思います。吉宗公が宗春公の処罰を許可したのは、政策問題ではなく、この朝廷問題が最大の原因だったのではないのでしょうか。

宗春公のただ一人生き残った実子の頼姫は、宗春公が蟄居した翌年には八代藩主宗勝の養女となり、一度は親戚の九条植基公と婚約しますが、植基公が急に薨去したために破談となり、ひき続いて親幕派の代表である近衛家に後妻として嫁がされています。さらに、一条兼香公

の息女たちを紀伊・水戸・一橋・清水という御三家御三

卿の六つのうち四つに嫁がせているのも、吉宗公が、かなり宮廷問題に気を使っていた証拠です。兼香公の成人した娘は五人いますが、そのうち四人までもが御三家と御三卿に嫁ぐというのは異例中の異例です。幕府は、朝廷の反幕府派と尾張家が結びつくことをもっとも恐れていたのでしょう。そのために、反幕派の一条兼香公の息女たちを、吉宗公にもっとも近い親藩に嫁がせました。そして親幕派の近衛家からは、将軍家重と対立していた、吉宗公の次男の田安家に嫁いでもらい、一方では尾張家の息女を近衛家に嫁がせ、朝廷の動きを封じ込めたように思えます。尚、近衛家当主内前公に嫁いだ宗春公の実子の頼姫（従三位近衛勝子）が薨去する直前に尾張徳川家の祈願所の八事山興正寺に祈祷を依頼しています。



## 宗春公就任一年後の吉宗公からの詰問

享保十七年に吉宗公から宗春公に詰問の使者があつたといひます。五月とも九月ともいわれませんが、その日は定かではありません。幕府の公式記録である御日記・御記録には一切記されていないのです。使者は目付の滝川播磨守元長と石河庄九郎政朝。吉宗公内々の密使だったのでしようか。それとも吉宗公ではなく老中たちからの密使であつたのでしようか？

### 滝川元長

寛文二(1666)年生であり、当時七十一歳。目付の最年長者。家祖大原資征は尾張国に来て浅井信濃守に仕え、後代に滝川一益に寵愛され滝川姓を得た一族だそうです。

### 石河政朝

貞享三(1686)年生まれ。尾張藩家老の石河章長の五男。当時四十七歳。宗春公より十歳年長。兄弟に尾張藩家老の石河正章と、尾張藩附家老の竹腰正武がいます。目付であり、尾張に生まれ、兄弟が共に尾張藩の家老であるために選ばれたと思われまふ。研究書ではなぜか彼に注目せず、彼の位置について記されたものはありません。その後、小

普請奉行となり、宗春の蟄居謹慎直前の元文三年には江戸北町奉行となり、さらに大目付、江戸城西の丸番頭、西の丸留守居と異例の出世を遂げています。尾張藩のクーデターは、彼が北町奉行に就任した後に起きており、さらに蟄居時も江戸北町奉行という幕閣の中にいた事は、注目されるべきことです。

### 尋問内容

尋問内容は様々な文章で残されていますが『章善院様御話之次第』写本にしたがって、内容を簡略化して現代語で記します。

- 一、遊びを藩内で行うのは自由であるが、江戸は諸大名が入り交じっている。また公儀と御三家のことは異なっていると言いがいかなることか？
- 二、嫡子の万五郎はまだ公儀に届けでもしていない段階であり、そのお祝いに町人たちを藩邸に入れ、

しかも権現様拝領の幟旗を立てたのは問題ある。

三、公儀が出した質素儉約を守らず、既に一年が経っている。

他の方々も注目しているのであるから控えて欲しい

それに対して、宗春公は、表の場では「今後慎みます」と公式には応えています、非公式の場で反論します。

・世間の移ろいは刀刃のように鋭く、最近のなまくら刀は過去の刀には及ばない  
(新刀は古刀に及ばないという太刀にひっかけて現在の政治のあり方を批判)

・御三家とは、將軍家・尾張家・紀伊家のことと家康公は決められた。  
尾張と紀伊家には、天下と言って公儀と言わず

御意と言って上意とは言わず  
御使と言って上使とは言わず  
御返答と言って御請けとはいわない。



・藩内で遊びまくって、江戸では大人しくするというのは不誠実である。  
藩内でも江戸でも庶民を苦しめたことはない。

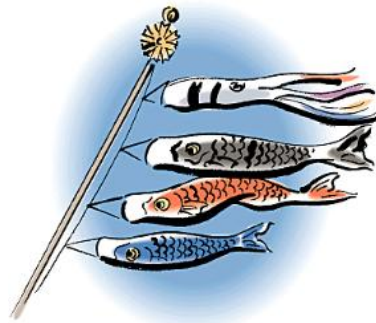
・家康公の旗を立てたのは、家康公の慈悲そのものである。  
節句を祝い披露することに問題はないはずだ。  
届け出は、成人の時であり、問題はない。

・ 倭約をしていないわけではない。  
倭約とは上に立つものが貪らず、  
庶民の安寧を願い、困窮のない世界を作ることである。  
私は聖人君子ではないので倭約は私個人が行っている。  
庶民に無理強いをし、表向き良い顔をするのは問題だ。  
負債はなく、華美は庶民のためでもある。法律も少ないので罪人は少ない。  
先代からの借金はすべて返し、新たな税も課していないし、藩札もない。  
一見、派手に見えるかもしれないが、実は自分自身は倭約している。

宗春公の返答は大変厳しいものでしたが、その後お咎めはありませんでした。ただこの

問題ですが、この前後の宗春公の兄高須藩主義孝の逝去と、京での『温知政要』の出版差止め、宗春公の病、吉宗公の御側衆の病気見舞い、家老石河正章の致仕と、筆頭附家老成瀬正幸の隠居とたてつづけにことが起きており、五月なのか九月なのかで、それぞれの出来事の意味が異なってきましたので、今後の精査が必要です。

尚、その年の暮れに、宗春公は鷹狩を行ないます。その際に詰問の使者であった滝川元長は將軍家の使者として、宗春から饗応を受けています。



## 宗春公の蟄居日前後の吉宗公の不可解な行動

徳川実紀によると、幕府から宗春公に蟄居謹慎を申し渡された前後に、吉宗公は不可解な行動に出ています。現代文でそれを抜き出してみると以下ようになります。

天文三年 大嘗会のお使いに堀川兵部大輔広益を京に派遣

天文四年

正月七日 堀川兵部大輔広益が京より戻り、報告のために吉宗公に拝謁

同日 京に前田隠岐守玄長、伊勢に大沢下野守基精、

日光に前田信濃守長泰を派遣する旨を言い渡す。

十日 障りがあつて東叡山のお参りを松平右京大夫輝貞に代参させる。

十二日 尾張藩の家老を江戸城に呼びつけ、宗春公の蟄居謹慎の旨を申付ける

十三日 浅野安芸守吉長・松平大学頭頼貞・松平播磨守頼幸を使いとして尾張藩に

赴かせる

同日 京への使いを命じた高家前田隠岐守玄長を呼び寄せ、五撰家の一つ

二条家の跡取り（宗春公の姪の子）に自らの名前の一文字を授け二条宗基と



### 吉宗公の行動の疑問点

名乗らせるように命じる。それと共に、関白左大臣一条兼香に太刀馬料銀を百枚、皇室内の女二の宮に巻物十・二種一荷、政所にも同じものを献じるように命じる。

二月三日 宗春の跡を継いだ尾張八代藩主徳川宗勝に山城国行の刀を授ける。

二月十七日京より高家前田隠岐守玄長が戻り吉宗公と謁見。

二月十八日突如として吉宗公が江戸城吹上御殿から二の丸にわたり、

天英院（六代將軍家宣御台所）近衛熙子の元を訪れる。

・正月十五日までは小正月内であり、基本的には謹慎処分などは取らないのが通例。三日待てば、小正月も明けるにもかかわらず、宗春公は蟄居謹慎となり、江戸城の門は半閉まり、あわせて御三家も慌てて登城し、自主的に謹慎をする事態となります。なぜこのように慌しく蟄居謹慎をさせなくてはならなかったのでしょうか。

・吉宗公は朝廷の大嘗会の報告の直後に、障りありと人を遠ざけ、恒例の東叡山の初参拝を代参で済ませています。その二日後に宗春公を蟄居謹慎を命じます。

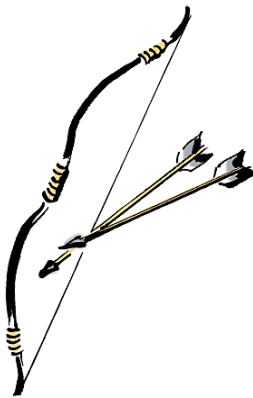
・宗春公の蟄居の申し付け人に意味ある三人、浅野安芸守吉長・松平大学頭頼貞・松平播磨守頼幸を選んでいます

・蟄居当日に、五撰家の吉事を前田玄長に命じています

・尾張八代藩主宗勝に山城国行という意味深な太刀を授けています

・京の五撰家への使者が帰った直後に天英院の元に突然渡っています

これらの一連の行動は通常ではありません。何らかの意図があったものと考えられます。



## 当時の朝廷と幕府の関係

五代將軍綱吉公の頃、靈元天皇は一条冬経（兼輝）公を重用し、親幕派であった左大臣近衛基熙公を飛び越え、右大臣の一条冬経公を関白・藤長者に任命しました。これには幕府も驚いたようです。靈元天皇は徹底して基熙を嫌い、上皇になった後に下御靈神社に基熙公を呪詛する願文を奉納するほどでした。

靈元上皇は、父である後水尾帝に倣い、幕府の禁中及び諸家諸法度の枠外である院政を始めます。その力で、長きに渡って行なわれていなかった大嘗祭を復活させ、皇室の権威回復を狙いました。この時も京都所司代は慌てたといえます。靈元上皇の子である東山天皇と、孫である土御門天皇は、靈元上皇の院政によって、自らの親政がなくなか行えなかった反動から、反靈元上皇派であり親幕派である近衛家と結びついていきました。六代將軍となる甲府宰相家宣夫人は基熙公の娘であり、御三家筆頭の尾張藩六代藩主継友の正妻は基熙の嫡男家熙の子でもあり、近衛家は親幕府であったのです。近衛基熙公と対立していた冬経公が関白を辞めさせられ、基熙公が関白となります。そのため

にたびたび靈元上皇は東山帝と土御門帝に苦言を呈する事となります。享保十七年に、靈元法皇が崩御します。靈元法皇が崩御した後に、法皇は下御靈神社

の相殿にも祀られます。下御霊神社は創建の初めから怨霊を鎮めるための神社であり、朝廷も幕府も、反幕派の頭目であった靈元法皇をかなり恐れていたことが伺われます。

その靈元法皇の曾孫であり、幼き頃から可愛がられてきたのが桜町天皇。桜町天皇の側近の一条兼香公は、靈元帝の側近の一条冬経（兼輝）公の養子です。しかも、基熙公の子である家熙公、孫である家久公を政敵としていました。靈元法皇は和歌や書に通じていたこともあり、その弟子たちが宮中で勢力を持つようになり、近衛家久公が没して、親幕派の公卿が居なくなることにより、朝廷内は桜町天皇と一条兼香公・道香公親子の独壇場となります。このころの摂家は、兼香公の息子の基輝公が幼くして鷹司家の当主となりました。また、九条家と二条家は尾張藩四代藩主吉通の孫が幼き当主となりました。

実はこの一条兼香公と吉宗公とは浅からぬ因縁があります。享保五年に水戸藩から幕府に大日本史が献上されました。翌年、その刊行の許可を幕府は朝廷に求めます。その時の朝廷側の検査役が有識故実の練達者でもあった一条兼香公でした。兼香公はそれを精査するために十年の月日をかけます。幕府からの催促もあり、十年後の享保十六年に右大臣となった一条兼香公は刊行を不許可とする旨を幕府に伝えます、大日本史は南



朝を正統としており、現在の朝廷は北朝系なので認められないというものでした。ところが、享保十九年に吉宗公は独断で大日本史を刊行してしまいます。その翌年に桜町天皇が即位。吉宗公によって顔に泥を塗られた形の一条兼香公は朝廷側の中心人物へと進んでいました。

桜町帝は、歴史家であった柳原紀光から延喜天暦の治（醍醐・村上両天皇の治世）以来の聖代と褒めたたえられています。延喜天暦の治は後醍醐天皇も理想とした天皇の親政であり、桜町帝は幕府から朝廷の権力を取り戻す親政を狙っていたと考えられます。桜町帝は、靈元法皇の和歌を編纂するなど靈元法皇に心酔していました。もちろん反幕思想を曾祖父靈元法皇から受け継いでいたはずで、その桜町帝と、吉宗公に泥を塗られたことがあり親幕派の近衛家と対立してきた一条兼香公が、土御門帝の時には行なわれなかった大嘗祭を復活させます。これは靈元上皇の時に順ずるもので、あきらかに反幕的な行動であったのですが、財政が逼迫していたにもかかわらず、幕府はこれを押さえることができませんでした。貨幣を改鑄したばかりで、朝廷と揉めることは、全国的に大きな障害が生じる可能性があるからです。大日本史の時の失敗は繰り返すことができません。

また兼香公は日記でも藩札を発行した紀州を批判して尾張を褒めたたえており、尾張に急接近していました。宗春公の愛妾のお薫の方は京出身であり、靈元法皇の側近の一



人であった冷泉為久を和歌の師としていました。尾張藩は代々勤皇派。しかも、尾張藩の儒官や藩医など藩主に近い人達のほとんどが京で学んでおり、尾張藩は京に深い人脈がありました。その代表が吉見幸和。彼は有識故実に精通していたこともあり、靈元上皇の側近であり桜町天皇の側近である滋野井公澄や難波宗建ら公卿と師弟関係でもありました。さらに。宗春公の姪の子たちが五撰家のうち九条と二条の二つの家を占める状況となっていたのです。さらに、尾張家と九条家と一条家と縁戚であるのが広島浅野家。もし浅野家を通じて、朝廷と尾張家が一連になると、五撰家のうち、一条・鷹司・九条・二条の四家が反幕となってしまう。

元文四年正月七日、大嘗会にお使いに出ている堀川兵部大輔広益が江戸に戻り、吉宗公に謁見します。そこから御日記も御記録も記録がなく、吉宗公は病と称し十日の東叡山参詣を代参に切り替えます。そして十二日に尾張藩の家老を呼び出し、宗春公の蟄居謹慎を伝え、十三日に正式な使いを尾張藩邸に差し向けます。その直後に、朝廷と二条家と一条家に使いを出し、相当な贈り物をしています。更にその直後に、兼香がこき下ろした紀州藩の藩主徳川宗将に兼香の娘が嫁ぐことが決まります。ここに尾張と朝廷の間に楔を打ち込むこ

とに成功した吉宗公。次の一手が、和歌でした。幕府から突如として優れた和歌の提出を朝廷に求められます。和歌に優れた者と建前上は言っては居ますが、和歌の伝授を受けているのは靈元法皇の弟子たちであり、反幕の温床でした。そのあぶり出しを幕府は測ったものと考えられます。一条兼香公は四名を推挙（中院通躬・烏丸光榮・三条西公福・冷泉為久）します。

・中院通躬・烏丸光榮・三条西公・冷泉為久は、靈元院の側近。

その後、兼香公は突然と中風と称して関白座位のまま表舞台から消えます。そして息子の道香を内覧として、自身の代わりに桜町天皇の側近として送り込まれます。この動きを観ると、尾張宗春公を蟄居させ、將軍家の親藩と無理やり縁戚にさせられる事への抗議と、次への一手の両方が含まれているようにも見えます。

朝廷は、尾張という旗印を失った後も桜町帝と一条兼香公・道香公親子によって反幕体制が取られていきますが、近衛家・九条家・二条家・鷹司家共に成人し、一条親子独裁に反感を持つものも増え、反幕運動は潜伏するようになります。しかしこの動きが幕末へ繋がっていきます。

靈元天皇（上皇・法皇）

承応三（1654）年五月二十五日、享保十七年八月六日

在位 寛文三（1663）年一月二十六日、貞享四（1687）年三月二十一日

後水尾天皇の第十六皇子 長兄後光明天皇の養嗣子に入り

在位の前半は後水尾院による院政 後半は親政

朝廷の復権を目指し、反幕府的な行動が多かった。

小倉事件を引き起こすが、それは院政を長期化させるための策謀であった。後に小倉事件に関わったものを赦免している。

親幕派の近衛基熙と対立し、基熙を下御靈神社で呪ったほどである。親幕派の公卿を側近から排除した。

讓位後、仙洞御所に移り、仙洞様と称される。

朝廷権威回復の象徴として大嘗祭を東山天皇の時に執行。

和歌に通じ、靈元院歌壇と呼ばれるグループを作った。

書道にも巧みで、有栖川流の元祖。

墓所は京の泉涌寺内の月輪陵

## 一条兼香

元禄五(1693)年十二月十六日〜寛延四(1751)年八月二日

准三后 関白 太政大臣

五摂家鷹司房輔の子。靈元帝の側近であった一条兼輝(冬経)の養子。養父の影響もあり有識故実に長けていた。権大納言時代に幕府より大日本史の内容精査を頼まれるほどであった。しかし、養父同様に靈元上皇の秘蔵つ子であり、さらに靈元上皇を尊崇していた桜町天皇の側近であったために、反幕府であった。親幕府の近衛家家久が薨去すると、すぐに反幕の象徴であった大嘗会を復活させ、さらに新嘗祭を毎年恒例化させる。その他宮中の行事の復活を次々に打つ。そのために幕府から目をつけられ、息女のほとんどを御三家と御三卿に嫁がせることになってしまう。息子の道香と共に専横化が進み、最後は失意のうちに薨去したという。



## 蟄居を申し渡した使者

謹慎申渡の使者は浅野安芸守吉長・松平大学頭頼貞・松平播磨守頼幸。この人選には意味が込められているように思われます。

### 松平大学頭頼貞

水戸家の御連枝、陸奥守山藩主。寛文四(1664)年生まれ。当年七十六歳で、親藩の長老格。知行地には赴かず、常に江戸に在府していました。尾張家との関わりは、跡を継いだ三男松平頼寛の正室に、宗春の兄である尾張藩の御連枝松平義孝の娘元姫を迎えていることです。

### 松平播磨守頼幸

水戸家御連枝、常陸府中藩の第四代藩主。享保四(1719)年生まれ、当年二十一歳。知行地には赴かず、常に江戸に在府していました。尾張家との関わりは、兄松平武元が養子に入った館林藩の先代武雅は、最初は尾張家御連枝の高須藩に養子に入る予定でした

が、高須藩に実子が誕生したためご破算に。

この水戸家御連枝の両家とも、尾張家御連枝の高須藩と浅からぬ因縁があります。宗春の若い頃の教育係が高須藩主松平義行であり、宗春の後に八代藩主になったのは高須藩主松平義淳こと後の徳川宗勝であるからです。

### 浅野（松平）安芸守吉長

天和元(1681)年生まれ、当年五十九歳。正妻は加賀前田家の娘で、数人の子を設けており、側室がいませんでした。遊びを覚えて吉原から二人の遊女を見受けしようとしませんが、それを諫めるために吉長が広島に居る享保十五年に、正室は江戸藩邸で割腹自殺(51歳)をしてしまいます。それ以来、吉長は遊びをやめて真面目になったといえます。ここから、遊び人の風評が立ったのでしよう。松平の名をいただいているとはいえ、浅野家は外様の雄藩。吉長と宗春公は遊び仲間であったと風評では言われていますが、これには疑問があります。実際、浅野家は尾張藩と關係が深いからです。浅野家の初代長政は尾張出身。また、吉長の母は尾張二代藩主徳川光友の娘。つまり、宗春の大叔母が

吉長の母です。また尾張藩初代義直公の正室は浅野幸長公の娘。さらに注目すべきなのは、吉長の妹二人は、五撰家の九条師孝公(弟の九条幸教が後継。幸教の正妻が尾張四代藩主吉通の娘)と一条兼香公に嫁いでいることです。尾張藩と関わりの深いのは、浅野家だけではありません。それにも関わらず外様の雄藩の吉長をわざわざ尾張家に派遣するということは、親戚ということもありますが、五撰家の九条家と一条家との関わり、特に一条兼香公が問題であるという示唆にもなりえます。浅野が使者であるからこそ、宗春公は禁裏のことを推察し、おとなしく隠居謹慎を受け、その後も大きく暴れることなく隠居生活を楽しんだのではないかと思われまます。

宗春公の謹慎後、播磨姫路藩主榊原政岑が、吉原一の太夫である高尾太夫を身受しますが、これに吉宗公は激怒します。一般的には、宗春公と政岑、吉長の三人が遊んでいたといいますが、直接的な記録はありません。吉長の妻が亡くなったのは享保十五年、政岑が十八歳で旗本を継いだばかりで、しかも旗本の中でも最上位ではなく、尾張家や浅野家とは、明らかな身分違いでした。また、宗春公は吉原では春日野一筋。幕府が大名の遊郭出入りを禁じる直前に春日野を身受けし、名古屋に連れて行き、その後は宗春は遊郭に出入していません。宗春公は形式的には幕府の法令を遵守する立場を、条々でも述べており、決して逸脱をしていませんでした。ところが政岑は、姫

路藩主という親藩でも有数の名家（徳川四天王榊原康政の嫡流）の藩主となると、吉原一の高尾太夫に入り浸り、幕府の方針から大きく逸脱してしまつたようです。吉宗公は、宗春公を不本意ながら謹慎蟄居させなくてはならなかつたがゆえに、政岑の行動が許せなかつたのではないかと思ひます。吉原・遊郭という名前だけで、宗春公と吉長、政岑を安直に結びつけるのは問題があると思ひます。

### 吉宗公による二条家と一条家への使者

高家前田隠岐守玄長は、前右大臣三条西実条の孫であり前大納言押小路公音の次男。豊臣秀吉政権下の五奉行の一人である前田玄以の子孫でもあり、武家となつて前田を名乗りました。貞享三（1687）年生まれ、当年五十三歳。幕府が尾張家に蟄居謹慎を命じ、御親藩が総登城し謹慎したその日に、吉宗公は、二条家の跡取りに自らの名前の一文字を授けるように命じ、一条兼香に太刀馬料銀を百枚、女二の宮と政所に巻物十・二種一荷を献じるように命じています。

## 二条宗基

享保十二(1727)年五月生まれ。五撰家の前内大臣二条宗熙公の養子で、同じ五撰家の前内大臣九条幸教公の実子。実の兄弟に九条植基公。この兄弟の実母は、尾張四代藩主吉通の子の千姫。宗春公にとっては九条植基公と二条宗基は姪の子に当たります。

吉宗公は、宗春公に蟄居を命じた当日に、その宗基公に自分の名前の一字「宗」の名前を授けました。名前の一字を授け、その文字を上につけさせるのは、これは相手を支配するという印でもあります。しかも、それと同時に関白左大臣一条兼香公に献金。更に後年のことですが、兼香公の娘たちは、知姫は一橋家の徳川宗尹公に、絢姫は水戸家の徳川宗翰公に、愛姫は紀伊家の徳川宗将公に、富子は桃園天皇に、俊姫を清水家の徳川重好公に嫁がせています。尾張と田安以外の御三家御三卿全てと一条家の縁を結んでいる点を考えると、吉宗が兼香公をいかに重視していたかが窺い知れます。それと同時に、兼香公の政敵である親幕派の近衛家との縁組みでは、宗春公の娘の頼姫を近衛内前公に嫁がせ、田安家の徳川宗武公の正妻には内前公の姉の通子を迎えています。

## 山城国行

吉宗公は、宗春公の跡を継いだ八代藩主宗勝公に山城国行という太刀を与えています。国行は来派の刀匠で、鎌倉中期に活躍しました。彼が来派の実質的な祖といわれます。この刀は重要文化財として、徳川美術館に今も伝わります。この山城という名に、吉宗公は大きく意味を込めたように思えます。京の所在地は山城国だからです。

## 天英院近衛熙子

寛文六(1666)年三月生まれ。当時七十四歳。六代將軍徳川家宣公の正妻。靈元天皇・一条冬経公の政敵であった前関白太政大臣近衛基熙公の娘の熙子。吉宗公が將軍に就く際に大きく影響を及ぼし、大奥に吉宗公の正妻が居なかったこともあり、吉宗時代の女性陣を実質的に束ねていた実力者。

前田隠岐守玄長が京から帰った直後に、吉宗公は天英院に会いに行っています。突然の出来事であったらしく、徳川実紀には吉宗公が、吹上御殿から天英院の居る二の丸に渡ったことが記されています。京へのお使いの拝見後に渡っているという事は、かな

り意味深いと思います。

以上のことから考えて、吉宗公は朝廷と仲が良かったというよりも、かなり意識的にことを構えないように、朝廷を徐々に支配するように動いていました。逆にいうと朝廷側は常にうごめいており、それを吉宗公は事無きようにさばいていたようにさえ感じます。突然の宗春公への蟄居申し渡しと朝廷への対策が、軌を一にしています。このふたつの流れが、全く別ものであったとするほうが無理があるように思われます。

その点からして、吉宗公は宗春公を蟄居させるという懲罰を加えることで、朝廷が尾張藩と結びつかないようにしたように拝察されます。

## 宗春公の主な親族（以下敬称略）

両親

### 徳川綱誠（つななり）

尾張藩第三代藩主（瑞龍院殿 誠公）贈従二位権大納言 宗春の父

承応元（1652）年七月二十九日〜元禄十一（1699）年十月十六日 享年四十八歳

父は尾張二代藩主権大納言光友（瑞龍院殿 元禄十三年薨去）

母は三代将軍徳川家光の長女千代姫（靈仙院 元禄十一年逝去）

藩主在位は元禄五年〜元禄十二年

母が三代代将軍家光の娘で、血筋的には最も宗家に近い存在。

光友公が長生きしたために、影に隠れた存在だが、英邁であったという

父光友は、江戸の戸山藩邸を作り、名古屋御下屋敷を隠居所とした。

続く吉通、継友は御下屋敷を放置したが、宗春が復興

宗春は綱誠の二十男第三十四子。幼名は五郎太 綱義

**梅津** (宣揚院) 宗春の実母

寛文二年(1662)〜 寛保三年(1743) 享年八十二歳

浪人三浦太次兵衛嘉重および鈴木氏の間の長女。

父は後に成瀬隼人正正親の家臣となる(200石)

弟嘉貞は三之丸詰め 嘉豊は宗春小姓 景包は朝倉家養子

妹は松平甚右衛門に嫁ぐ

長子の城次郎誕生時は三十三歳(城次郎は四歳で他界)

次子宗春公の誕生時には三十五歳

当時としてはかなりの高齢で側室になっている

当時のこの年齢で側室になるには、それなりの才能が必要

信心深い人で、寺院に布施をした記録が多数ある。

**実子**

**富** 理泡院 母は海津(栄昌院)

享保九(1728)年四月九日〜享保十八(1733)年六月十七日夭

**補誦** 凜霜院 母は民部（永光院）

享保十一（1726）年正月四日～享保二十（1735）年十月八日

**八千** 睦徳院 母は海津（栄昌院）

享保十一（1726）年十二月八日～享保十六（1731）年五月十七日

**頼君** 従三位徳川勝子 関白近衛内前室

霊樹院 於須亭 母は伊予

享保十三（1728）年正月二十日～宝曆十（1760）年十月十日

元文四年 江戸の尾張藩邸戸山屋敷に移り住む

元文五年 八代藩主宗勝の養女に 三喜姫と改名

伝姫と改名

九条植基（従姉妹の子）と婚約

名古屋に上り祖母の宣揚院（宗春母）の御殿に移り住む

寛保元年 九条植基薨去し破談

延享三年 結納 頼姫と改名

近衛内前と婚礼

**万五郎** 慧運院 国丸 母は海津(栄昌院)

享保十四(1729)年十二月十七日〜享保二十(1735)年九月九日

享保十六年 戸山屋敷へ転居

享保十七年 市ヶ谷屋敷へ転居

享保十八年 国丸と改名

享保十九年 袴着の儀式

**八百姫** 秋藏院 母は民部(永光院)

享保十五(1730)年正月十三日〜享保十六(1731)年七月一二日

**以津姫** 性如院 母は伊予

享保十五(1730)年八月二十一日〜享保十六(1731)年九月四日

**龍千代(龍千世)** 円徳院 母は民部(永光院)

元文二(1737)年十一月十二日〜元文二(1737)年十二月二十四日

養女

近姫

上杉宗房室 蓮胎院 実母浅野綱長女三姫  
正徳三(1713)年八月七日〜寛延四(1751)年五月二十五日  
尾張藩御連枝陸奥梁川藩二代藩主松平出雲守義方の娘で  
陸奥梁川藩が亡くなった後、尾張藩主となった宗春の養女となる

側室

海津

栄昌院 浪人原田吉兵衛の娘  
富姫・八千姫・万五郎の母  
宗春公謹慎後、戸山屋敷へ移住

民部

永光院 家臣山中清兵衛の娘  
補誦姫・八百姫・龍千代の母  
宗春公謹慎後、戸山屋敷へ移住

**伊予**

銀昌院 丹羽氏  
頼姫・以津姫の母

外へ嫁ぐ

**左近**

宗春謹慎後、宣揚院屋敷に  
頼姫が宣揚院屋敷に入った後は、御下屋敷西南に屋敷を持つ

**相模**

宗春謹慎後、兄内藤吉左衛門（大津町）の元に

**おはる**

貞幹院 吉原太夫の春日野  
〜天明二（1782）年五月

宗春謹慎後、父鈴木庄兵衛屋敷（御下屋敷東辰巳町内）に  
宗春が御下屋敷に移った後は宗春のお側に

**お薫**

（和泉・いづみ・花子） 宝泉院 猪飼氏  
正徳五年（1715）〜安永九（1780）年十一月八日逝去（66）

宗春謹慎後、小納戸役長坂藤右衛門に同道して江戸より尾張に

宗春公の女中として宗春公の元に

宗春公三之丸築居時代の唯一の側室

宗春公が御下屋敷に移った後は宗春公のお側に

安永四年、興正寺の諦忍妙龍を招いている

京出身で、和歌を冷泉家より学ぶ

成人した兄弟姉妹

**徳川吉通**（よしみち）

尾張藩第四代藩主（圓覺院殿） 従三位権中納言 宗春の兄

元禄二（1689）年九月十七日～正徳二（1713）年七月二十六日（25）

藩主在位は元禄十二年～正徳三年

父は第四代藩主綱誠

母親の本寿院お福は、乱行をしたために、当時は放置され荒れていた名古屋御下屋敷に幽閉される。宗春公により本寿院は蟄居を解かれる。

第六代将軍徳川家宣が、吉通を後継者に望んだほど英明であった。

名古屋に戻ったことが二度しかなく、反対派からは厳しい評価も受ける。  
実子千姫（始徳姫・随縁院・三千姫）は  
五撰家の九条幸教室。九条植基・宗基の実母

### 徳川継友（つぐとも）

尾張藩第六代藩主（晃禪院殿） 従三位権中納言 宗春の兄

元禄（1692）五年二月八日〜享保十五（1730）年十一月二十七日（39）

藩主在位は正徳三年〜享保十五年

父は第四代藩主綱誠

母は和泉（泉光院 林氏） 徳川継友

吝嗇が激しく蓄財家であったために、財政を再建させたとされているが  
実際は家老たちの合議で政務は運営されていたらしく

財政状況の事実はどうかはわからない。

吉宗と將軍職を争うが敗れる。

宗春は藩主になった後に継友の政策に反して  
開放政策をに切り替え、条法を元に戻し、御下屋敷を復活させたことなどから  
継友に強く反発心を持っていた可能性が高い

**松平義孝** (よしたか)

尾張藩御連枝美濃国高須藩第二代藩主 (高德院)

従四位下、権少将、摂津守 宗春の兄

元禄七(1691)年九月二十七日〜享保十七(1732)年五月二十一日(39)

父は第四代藩主綱誠

母は唐橋 (卓然院 里見氏)

**松平通温** (みちまさ)

(顕照院) 従四位下、侍従、安房守、左近衛権少将

宗春の兄 松平義孝同母弟

元禄九(1693)年五月二十八日〜享保十五(1730)年五月十九日

父は第四代藩主綱誠

母は唐橋 (卓然院 里見氏)

兄の継友が紀州吉宗に將軍継承で敗れると、乱行を起こし、尾張国内に幽閉

**松姫** 光幻院 (光現院) 宗春の妹

加賀藩第五代藩主前田吉徳室 (宝永五年十一月十八日嫁)

五代将軍徳川綱吉養女

元禄十二(1699)年十二月十五日〜享保五(1720)年九月二十日

父は第四代藩主綱誠 母は倉橋(利清院 上村氏)

**尾張藩後継、**

**徳川宗勝**(むねかつ) 友相、友淳、義淳

尾張第八代藩主 (賢隆院) 従三位 権中納言

宝永二(1705)年六月二日〜宝暦十一(1761)年六月二十一日

藩主在位 元文四年〜宝暦十一年

父 尾張藩御連枝川田久保家初代松平友著(光友の十一男)

母 湯本氏(繁、円珠院)

正室 吉通の娘

享保十七年(1732)年、御連枝高須藩松平義孝の養嗣子だ。

宗勝が尾張藩をついだ後は、附家老竹腰正武主導で儉約緊縮藩政が行われる

宗勝自身は学問好きであり、後の明倫館となる学問所の創設や

医学書の創設などに力を注ぐ  
名古屋城三之丸に謹慎蟄居している先代藩主宗春に、  
掛け軸を贈るなど気を使っていたようである。

## 宗春ロマン

時の権力者によって、恐れられ、悪役に仕立てられた尾張宗春公。実際は、庶民を思い、人としての道、藩主としての道を全うしようとしていたように思えます。そのためなら、時の権力者の意向と異なっても良いという気骨の持ち主でした。その上、ファッションリーダーであり、またお茶や絵画をたしなむなど数奇者でもあり、粋な人でした。蟄居謹慎になっても、「尾張初もの」と笑い飛ばし、蟄居中も尾張藩主達によって大切にされていたことが伺われます。もし、朝廷が余分な動きをしなければ、世界に先駆け日本独特の物心両面の精神文化を尾張藩に築き、日本を牽引していたのではないでしょう。権力に未練もなく、権威に媚びることもなく、威風堂々と、しかもお洒落に生き抜いた宗春公の想いが、現代に活かせるように強く願います。